

タイトル	インドネシア西ジャワ州スンダ農村調査報告
著者	須田, 一弘; 梅崎, 昌裕; SUDA, Kazuhiro; UMEZAKI, Masahiro
引用	北海学園大学人文論集(58): 53-72
発行日	2015-03-31

インドネシア西ジャワ州スング農村調査報告

須 田 一 弘・梅 崎 昌 裕*

1. はじめに

インドネシアは、世界第4位の約2億3760万(2010年国勢調査)の人口を有している。陸地総面積は189万km²、17,500以上の島々で構成されており、そのうち人が住んでいる島はおよそ6,000にのぼる。インドネシアの人口分布の特徴のひとつは、ジャワ島への極端な人口集中にある。すなわち、国土のおよそ6.7%(126,700km²)を占めるに過ぎないジャワ島に、全人口の6割の約1億3900万人が居住しているのである。ジャワ島の爆発的な人口増加は19世紀半ばから生じており(ギアーツ, 2001: p 111-2)、植民地政府は20世紀初頭から、スマトラ島への移住政策(トランスミグラシ)を開始した(Mubyarto, 2000)。トランスミグラシ政策は、その後、インドネシア政府にも受け継がれ、スマトラ島だけではなくカリマンタン島やスラウェシ島などの外島へと拡大されて現在に至っている(Suparno, 2007)が、それにもかかわらず約6割の人口がジャワ島に集中していることは、同島の人口支持力が、外島にくらべ抜きんできていることを表している。

ジャワ島の人口を支えるのは、水田、とくに山がちな斜面に精緻に作られた棚田で行われる二〜三期作または二〜三毛作というシステムである。ギアーツはこれを「農業のインボリューション(内に向かう発展)」と呼び、詳細な歴史生態学的分析をおこなった(ギアーツ, 2001)。ギアーツの分析

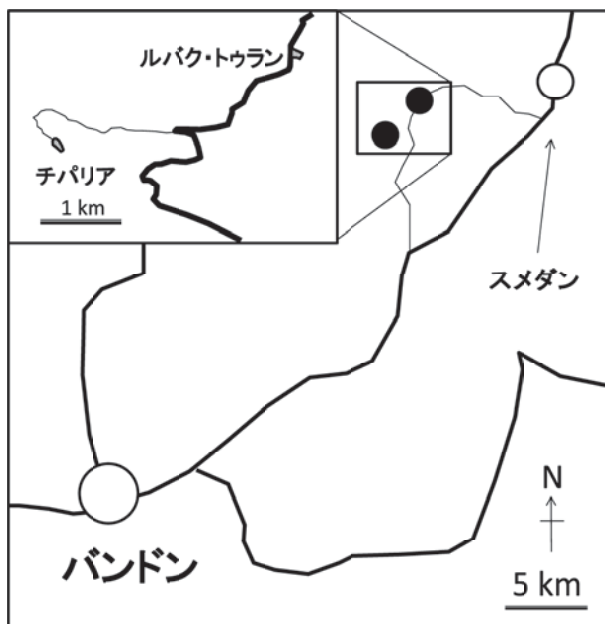
* 東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻人類生態学教室

後、半世紀以上を経た現在、ジャワ島の農村ではどのような生産システムがおこなわれているのかを、定量的なデータに基づいて分析するため、ジャワ島の中でもとくに人口の多い西ジャワ州の農村で調査を行った。西ジャワ州は、インドネシアの34州のうち、最も多い約4300万人（全人口の約18%）の州別人口を有しており、そのほとんどがスダ語を話すスダ人である。2003年の西ジャワ州の農家数はおよそ329万世帯で、全世帯に占める農家の割合は約33%、土地所有世帯の平均農地面積は約0.4 haとなっている（プロマーコンサルティング、2013）。このうち、州都であるバンドン市の北東に位置するスメダン県ランチャカロン郡（*Kecamatan Rancakalong, Kabupaten Sumedang*）から、二つの集落を選び、生業に関わるデータを収集した。この小論では、各世帯の所有農地面積、樹木栽培及びそれらの生産、家畜飼養などに関するデータの分析から、西ジャワ州のスダ農村の現状、とくに、生業の多様性と世帯間の所得格差について考えてみたい。

なお、この小論のもとになるインドネシア調査は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金『東南アジアにおける人口流動と資源利用の変容が環境に与える影響に関する研究』（基盤研究（C）、課題番号26360021）の補助を受けて、2014年8月23日から9月8日にかけておこなった。

2. 調査地の概要

調査対象地区は、スメダン県ランチャカロン郡に属するナガラワンギ村（*Desa Nagarawangi*）のルバク・トゥラン集落（*Dusun Lebak Trang*）と、ランチャカロン村（*Desa Rancakalong*）のチパリア集落（*Dusun Chiparia*）の二つの集落である（地図1）。ルバク・トゥラン集落は、州都バンドンから直線距離で北東におよそ28 km、チパリア集落は同じく北東におよそ24 kmに位置しているが、ともに山地を迂回する道路を通らなければならないため、自動車での移動には2時間半近くかかる。ルバク・トゥランは、ランチャカロン郡を南北に結ぶ幹線道路に面しているが、チパリアは幹線



地図 1 調査地

道路から細く険しい枝道を 2 km ほど入らなければならない。こうした交通に関する差異が、後述のように現金獲得活動の多様性に影響を与えている。

インドネシアの地方行政単位には、村（Desa）の下位区分として、日本の町内会にあたる RW（Rukun Warga）が置かれ、さらにその下に、かつての日本の隣組を手本にした、ほぼ 50 世帯を単位とする RT（Rukun Tetangga）が置かれている。自然村であるルバク・トゥランは一つの RW を構成しており、その RW は五つの RT に分かれている。これらルバク・トゥランの 57 の RT のうち、幹線道路に近い第一 RT を調査対象とした。なお、2014 年 8 月の調査対象 RT の世帯数は 43、人口は 127 人（男性 59 人、女性 69 人）であった。いっぽう、チパリアは自然村が一つの RT を構成しており、世帯数は 37、人口は 102 人（男性 50 人、女性 52 人）であった。



写真 1 ルバク・トゥラン



写真 2 ルバク・トゥランのタロン

ルバク・トゥランの調査対象 RT (以下ルバク・トゥラン) は、前述の幹線道路沿いに 4 世帯が居住し、残りの 39 世帯は幹線道路から東に延びる枝道の南側に密集して居住している (写真 1)。他の RT の住居は、枝道を挟んで両側に数列にわたって建っており、その外側には水田が広がっている。住宅地の標高はおよそ 830 m である。また、枝道を東に進むと住居が途切れ、その先はタロン (*talun*) と呼ばれるアグロフォレストリーが広がっている (Okubo *et al.*, 2010)。タロンには建材となる樹木やクローブ (*Syzygium aromaticum*)、竹、サトウヤシ (*Arenga pinnata*) が植えられている他、その合間にキャッサバやトウガラシなどの作物も植えられてい

る（写真2）。ルバク・トゥランの生業の中心はこれらの水田とタロンであるが、度重なる相続や売買の結果、住民の水田とタロンは必ずしもルバク・トゥラン集落内にあるとは限らず、他のRWや他村の水田やタロンを利用している世帯も多い。また、住居の周囲のわずかな土地に、家庭菜園としてバナナやトウガラシを植えている世帯や、養魚池を所有している世帯もあり、生計の助けとなっている（Kubota *et al.*, 2002a; Kubota *et al.*, 2002b）。

チパリアは、幹線道路から細く曲がりくねった枝道を2 kmほど進んだ、道の突き当りの尾根に住居が並んでいる（写真3）。標高は約1,000 mで、両側の斜面とそれぞれ谷底の川を挟んだ反対側の斜面に多数の棚田と畑が広がっている（写真4）。川の上流（西側）の棚田の上部にはタロンがあり、建材やクロープ、竹、サトウヤシなどが植えられている。また、住居と棚田の間のわずかな土地にも、数本のクロープやバナナが植えられている。

チパリアの生業域はこれらの棚田やタロンになるが、これらの土地はルバク・トゥランと同様に度重なる相続や売買のため、他集落の世帯が所有する土地がところどころに存在している。チパリアの住民が、ルバク・トゥランのように他集落の棚田やタロンを利用することはほとんどないが、他集落の住民がチパリア域内の土地を利用することはよく見られる。



写真3 チパリア



写真4 チパリアの棚田

3. 農業の概要

〈水田〉

ルバク・トゥランとチパリアの両集落とも、農業の中心は棚田を中心とした水田である。両集落とも古くから栽培されていた在来品種と、緑の革命によってもたらされた改良品種の両方を、耕作者それぞれの判断や水田の状況に合わせて植え付けている。一般に、収量は改良品種の方が多いが、味は在来品種の方が良いとされている。

熱帯に属する西ジャワ州では年間の気温にさしたる差はないが、降水量によって明確な乾期（6～9月）と雨期（10～5月）に分かれ、雨期には天水に依存した、そして、乾期には灌漑を利用した二～三期作の稲作栽培が可能である（五十嵐，1987）。しかし、多くの水はけのよい水田では、稲の収穫の後、再び水を引き入れて米を作るのではなく、主としてサツマイモを裏作にした二～三毛作が行なわれている。サツマイモは1990年代からランチャカロン郡に導入され始め、2000年頃から本格的に栽培が行なわれるようになった。ランチャカロン郡で栽培されるサツマイモは甘みが強いことで有名で、生のまま出荷されることもあるが、オーブンで焼き芋として調理し、バンドンなどの都市部で販売することもある。2年間を1サイクルとした場合、稲とサツマイモを交互に栽培することもあるが、稲の後

サツマイモの栽培を二～三度繰り返してから再び稲を栽培することもある。

実際の耕作は、自分の所有する土地で行われる自作の他、耕作において短期間にまとまった労働力が必要な耕起や田植え、収穫時に近隣から人を雇い、賃金を支払うことも行われている。また、他者の所有する土地を分益小作により耕作することもある。ジャワの農村の分益小作は、土地を所有しない零細農民と地主の間で行われることよりも、零細農民間で「労働の分散」として行われていることが注目されてきた（ギアーツ，2001：140-141）。ランチャカロン郡の分益小作も同様に、収穫高の半分を小作者と地主が分け合うことが基本だが、両者の合意のもとで割合が変わったり、小作者が現金で地代を支払ったりする場合もある。この分益小作制度は家畜飼養にも適用されている。その場合、所有者が雌の牛や山羊を親戚や隣人、友人に預けて飼育させる。飼育者はみずから餌を用意して育て、子供が生まれた場合はその半数をもらっている。

〈畑〉

両集落とも、かつて水田だった場所に水を引き入れず、畑として利用することもある（写真5）。収穫は作物に応じて年に2～3度の栽培を行っているが、同じ作物を続けて栽培することはなく、いくつかの作物を組み合



写真5 チバリアの畑

わせた耕作がみられる。両集落で栽培されている作物は、キャッサバ、バナナ、長ネギ、トウガラシ、キャベツ、タバコなどである。また、畑の耕作でも、水田のような分益小作が行なわれている。

〈タロン〉

タロンには建材となるアルバシア (*Paraserianthes falcataria*)、スリアン (*Toona sureni*)、ソプシ (*Maesopsis eminii*) や、花蕾が香辛料となるクローブ、サトウヤシやコーヒーなどの樹木が植えられている他、キャッサバ、タバコ、トウガラシなども栽培されている。ルバク・トゥランには製材所や家具工場があり、同所で伐採した木材はおもにこれらの工場に販売されるが、住宅を建てる資材として直接消費者に販売されることもある。

タロンに植えられているクローブはその花蕾が香辛料となる。収穫は年2回で、そのうちの1回が調査期間と重なったため、収穫及び乾燥作業を観察することができた。収穫は、木に梯子をかけ、男性が開花前の数個の花蕾を花冠ごとぎ取っていた(写真6)。収穫した花冠はそれぞれの家庭に運ばれ、女性の手で花蕾が外される。その後、天日で乾燥させると、薄緑の花蕾は褐色に変わり、クローブ独特の香りが漂ってくる(写真7)。

チパリアでは2～3本のクローブを所有する家族単位で収穫と花蕾はずし、乾燥が行なわれていたが、ルバク・トゥランでは、広いタロンで数10本のクローブを栽培している世帯もある。その場合、労働者を雇って収穫作業を行うことが多い。賃金は1日1人当たり Rp 5～60,000 (約5～6百円) で、その他に所有者から休憩時のタバコやコーヒーが提供される。1人1日の採集量はおよそ6～10 kg (乾燥前重量) であり、2～3人で2日間程度の作業で1本から30～35 kg 程度の花蕾が収穫される。

クローブの葉や枝からは、鎮痛、防虫などの効果があるクローブオイルが作られる。ルバク・トゥランの北、幹線道路を自動車で10分ほど走ったところに、小規模な製油工場があり、そこに葉や枝を販売することもある。価格は1 kg あたり Rp 1,000 (約10円) ほどである。

サトウヤシ (写真8) の樹液からは砂糖を作ることができる。樹液の採



写真6 クローブの収穫



写真7 クローブの乾燥（黄緑の花蕾は乾燥させると黒褐色になる）

集は、まず房状に着いている果実の付け根を専用の叩き棒で4日に1度叩いて樹液の出を良くする。それを1か月ほど続けた後、果実の根元を切って採集を開始する。初めのうちは1日当たり4リットル程度だった樹液の収量は徐々に低下していき、3か月後には半分の量になる。その頃になるとその木からの樹液の採集はあきらめ、別の木を探すことになる。採集した樹液はその都度鍋で煮詰めて、円形の枠に入れて成形して商品となり（写真9）、集落のよろず屋で販売される。

サトウヤシの葉柄の基部には、シュロのように黒褐色の毛が密集している。ルバク・トゥランではこの毛からイジュック（*ijuk*）と呼ばれる繊維を精製し、箒などの製品を作る小規模な工場がいくつかある。工場では、採集したばかりの毛から固い部分を取り除き、3～7日間水に漬けて柔らかくし、それをくしけずってイジュックを作る（写真10）。ルバク・トゥランの調査対象RTには、こうした工場を経営していたり、雇われたりしている住民が少なからず存在している。

4. 調査方法

ルバク・トゥランの幹線沿いのRT（43世帯）とチパリア（37世帯）に



写真8 サトウヤシ



写真9 サトウヤシの樹液を煮詰めて砂糖を作る



写真10 イジュック作り

ついて、すべての世帯に聞き取り調査を行った。聞き取りは世帯主またはその配偶者を対象とし、世帯員の年齢、性別、職業、水田・畑・タロンの所有面積と分益小作の有無、栽培している作物の種類、作物の耕作の順番、飼養する家畜の種類と個体数、一年間の米やその他の作物の生産高などを質問した。両集落とも、日常会話はインドネシア語ではなくスダ語で行われているため、聞き取りに際してはパジャジャラン大学生態学研究所に所属する修士課程の大学院生にスダ語で行ってもらった。聞き取り調査には、須田または梅崎ができるだけ同席し、不明な点をインドネシア語ま

たは英語で調査者に確認した。聞き取りの結果は質問紙票に英語で記入してもらい、その日の調査終了後に英語またはインドネシア語で内容の確認を行った。不明な点があった場合には、その日の夜か翌日に再び聞き取りを行った。

聞き取り調査の他に、水田や畑、タロンでの作業を観察し、作業の工程や賃金について質問した。また、イジュック精製工場、クローブオイル精製工場での作業を観察し、工程や賃金、価格について質問した。さらに、サツマイモの仲買人や大規模な樹木栽培者に、導入の歴史や価格の変化などを質問した。

5. 結 果

表1はルバク・トゥランの聞き取り調査の結果をまとめたものである。43世帯からすでに生業活動を引退した3世帯を除く40世帯の中で、農業を主たる職業とするものは13世帯(32.5%)に過ぎず、農村とはいいいながら職業が多様なことがわかる。のこりの27世帯のうち、イジュックの繊維精製工場を営んでいる3世帯(世帯番号11, 22, 24)と、兵士(同2)や公務員(同3)、教師(同4)、銀行のセキュリティ(同28)など安定した収入のある4世帯を除く20世帯は、他世帯の農作業を手伝ったり屋台などを営んだりしており、その収入は不安定で低い傾向がある。

自作のための水田を所有している世帯は9世帯に過ぎず、そのうち3世帯(同3, 7, 31)は農業以外の生業を主たる職業としている。水田を他世帯に貸しているのは2世帯のみであり、そのうち1世帯(同3)は、公務員をしている世帯主が200 bata (1 bata は14.29 m²)を分益小作制により兄に貸し付け、米とサツマイモの収穫の50%を受け取っている。水田を借りて耕作しているのは6世帯で、そのうち1世帯(同5)は土地を現金で借り受け、労働者を雇用してサツマイモを中心とした耕作を行っている。この世帯の場合、サツマイモを3回耕作した後、1回のみ米を栽培している。

表1 ルバク・トゥランの耕作面積と生産量

世帯 番号	人数	主な 職業	水田 (自作) (bata)	水田 (貸地) (bata)	水田 (借地) (bata)	畑 (自作) (bata)	畑 (借地) (bata)	タロン (自作) (bata)	在来品 種米生 産量 (kg)	改良品 種米生 産量 (kg)	サツマ イモ生 産量 (kg)	備 考
1	1	引退	0	0	0	0	0	9	0	0	0	
2	5	兵士	0	0	0	0	0	0	0	0	0	鶏8羽, 家鴨4羽, 養魚池
3	2	公務員	200	200	0	0	0	250	0	2300	3000	鶏30羽, 家鴨3羽
4	5	教師	0	0	0	0	0	60	0	0	0	
5	3	農業	0	0	400	0	0	150	0	800	18000	養魚池
6	3	小売業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
7	4	衣服製造	50	0	0	0	0	0	0	1050	0	鶏20羽 (他者所有)
8	3	農業	80	0	0	0	0	0	0	800	60	鶏4羽
9	4	農業	65	0	0	0	0	80	0	325	330	鶏15羽
10	2	農業	60	0	0	0	0	150	0	1200	0	鶏10羽
11	3	繊維製造	0	0	0	0	0	150	0	0	0	山羊4頭 (他者が飼養)
12	3	衣服製造	0	0	60	0	0	160	0	0	333	
13	2	農業	0	0	80	0	80	0	0	100	500	鶏1羽
14	2	農業	160	0	0	0	0	500	0	800	1666	山羊5頭 (他者が飼養), 鶏5羽, 家鴨5羽, 養魚池
15	4	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	山羊1頭
16	2	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
17	2	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	鶏2羽
18	3	屋台	0	0	100	0	0	0	0	900	150	鶏2羽
19	1	バイクタクシー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
20	3	屋台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
21	2	農業	0	150	0	0	0	200	0	200	916	山羊6頭, 鶏15羽
22	4	繊維製造	0	0	0	0	0	0	0	0	0	山羊2頭
23	3	バイク整備	0	0	0	0	0	60	0	0	0	
24	3	繊維製造	0	0	0	0	0	60	0	0	0	鶏8羽
25	2	屋台	0	0	0	30	0	0	0	0	0	
26	3	農業	0	0	0	0	0	100	0	0	0	山羊8頭
27	3	農業	0	0	0	200	0	0	0	0	2333	牛1頭
28	4	セキュリティ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	鶏7羽
29	2	農業	0	0	0	0	0	510	0	0	0	山羊5頭, 鶏30羽, 家鴨20羽
30	3	運転手	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
31	3	屋台	50	0	0	0	0	100	0	0	0	山羊2頭, 鶏4羽
32	1	引退	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
33	2	農業	0	0	0	0	0	50	0	0	0	鶏1羽
34	4	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	山羊4頭
35	4	公務員	0	0	0	0	0	130	0	0	0	
36	4	運転手	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
37	6	農業	400	0	0	0	0	400	280	280	4000	
38	3	村長	0	0	20	0	0	0	0	800	0	山羊3頭, 養魚池
39	5	農業	100	0	20	0	0	100	100	500	2500	山羊10頭, 鶏2羽, 兎5羽, 養魚池
40	2	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	家鴨10羽
41	3	屋台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	鶏1羽
42	4	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
43	1	マッサージ	0	0	0	16	0	0	0	0	0	
平均			27.09	8.14	15.81	5.72	1.86	74.86	10.27	187.97	345.62	
標準偏差			72.91	37.69	63.63	30.76	12.20	128.30	48.45	351.55	872.16	

1 bata は約 14.29 m² 700 bata ≒ 1 ha

前述のとおり、おもに水田では米とサツマイモの二～三毛作が行なわれているが、米に関しては在来品種よりも生産性の高い改良品種が栽培されていることが多い。在来品種を栽培しているのはわずか2世帯であり、その世帯も改良品種と同じ生産量（世帯番号37）か、改良品種の5分の1の量（同39）しか生産していなかった。サツマイモを収穫していたのは12世帯あり、この作物が米と同様に重要な作物であることがわかる。水田で米だけを収穫し、サツマイモの収穫を行わなかった世帯は3世帯だけであり、逆にサツマイモのみを収穫し米を収穫しなかったのは2世帯だけである。米は世帯で消費する量を除いた剰余分を販売するが、サツマイモは収穫量のほとんどを販売している。すなわち、米は自家消費用、サツマイモは販売用という傾向がある。

畑を所有している世帯は3世帯に過ぎず、土地を借りて畑を耕作している世帯は1世帯のみである。このうち2世帯（同25、43）は屋台を引いて氷菓子を売るなどのインフォーマルセクターの生業が主であり、耕作面積も小さい。また、畑を他世帯に貸しているものはいなかった。ルバク・トゥランにおいては、畑がそれほど重要ではないことがうかがえる。

いっぽう、タロンと呼ばれるアグロフォレストリーは、全世帯の約44%にあたる19世帯が所有していた。前述のとおり、タロンでは建材となる樹木栽培の他に、サトウヤシやクロブ、コーヒーが植えられている。これらはルバク・トゥランの重要な収入源になっている。なお、ここではタロンの貸し借りは見られなかった。

備考欄には飼養する家畜・家禽の種類と個体数、及び養魚池の有無を記載した。26世帯が家畜や家禽を飼養しており、5世帯が養魚池を所有していた。家畜・家禽についても、分益小作のような制度がある。世帯25では、生まれる雛の25%を譲り受けることを条件に、他者の鶏を20羽世話していた。世帯14では生まれる子供の50%を譲り渡すことを条件に、他のRTの世帯に5匹の山羊の世話を任せていた。養魚池を所有しているのは5世帯に過ぎなかった。

表2はチパリアの聞き取り調査の結果をまとめたものである。生業を引

退した3世帯を除くと、農業を主とする世帯が23(67.6%)と3分の2以上を占めており、ルバク・トゥランとは異なり、農業が主要な生業であることがわかる。残りは風作りが4世帯、日雇い労働が3世帯、大工が2世帯、衣服製造と屋台での販売が1世帯ずつとなっている。風作りはいわば内職仕事であり、業者の依頼のもと、骨組みの竹ひごを削ったり、竹ひごの骨組みに紙を張り付けたりする作業を請け負っている(写真11)。風作りの作業は農家世帯のメンバーも行っているが、主たる生業を風作りに分類した世帯は耕地を持たず米やサツマイモの収穫がまったくない世帯(世帯番号13, 25, 31)か、水田を分益小作制で貸して、自分では耕作を行っていない世帯(同24)である。裁縫業(同5)は自宅でズボンの製作を請負

表2 チパリアの耕作面積と生産量

世帯番号	人数	主な職業	水田(自作) (bata)	水田(貸地) (bata)	水田(借地) (bata)	畑(自作) (bata)	畑(貸地) (bata)	畑(借地) (bata)	タロン(自作) (bata)	タロン(貸地) (bata)	在来品 種米生 産量 (kg)	改良品 種米生 産量 (kg)	サツマ イモ生 産量 (kg)	備	考
1	3	農業	80	0	0	0	0	25	270	0	0	1000	0	牛1頭、家鴨4羽	
2	5	農業	230	0	0	0	0	80	0	0	4600	0	0	牛2頭(1頭は他者所有)、山羊2頭、鶏8羽、家鴨12羽	
3	3	農業	50	0	0	0	0	0	100	0	1200	0	0	0	
4	2	農業	60	0	0	50	0	0	0	0	550	0	0	鶏2羽	
5	4	衣服製造	15	0	0	0	0	0	70	0	160	0	0	鶏8羽	
6	3	農業	460	65	0	90	0	0	700	200	3600	1050	200	牛1頭(他者飼養)鶏12羽	
7	3	農業	25	0	65	0	0	0	30	0	900	0	0	山羊12頭	
8	2	農業	0	0	0	50	0	0	60	0	0	0	0	山羊5頭(1頭は他者所有)	
9	2	農業	100	0	0	0	0	0	50	0	800	0	0	牛1頭、山羊1頭	
10	3	農業	30	0	0	0	0	0	50	0	200	200	0	牛1頭	
11	1	農業	0	50	0	0	150	0	0	0	700	0	0	山羊4頭(2頭は他者所有)、鶏7羽	
12	2	大工	60	0	0	0	0	0	0	0	300	0	0	0	
13	3	風作り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
14	2	農業	0	0	0	0	0	0	370	0	400	0	0	0	
15	3	農業	0	0	0	25	0	0	50	0	0	0	0	0	山羊5頭(他者所有)
16	1	引退	0	150	0	0	0	0	0	0	550	0	0	0	

インドネシア西ジャワ州スング農村調査報告（須田・梅崎）

17	1	引退	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	3	農業	70	0	0	0	0	0	80	0	650	0	0 牛1頭
19	1	引退	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	3	農業	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0	0 鶏6羽
21	3	屋台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 鶏4羽
22	3	農業	0	0	150	0	0	0	50	0	500	0	0 山羊2頭（他者所有）, 鶏7羽
23	3	大工	80	0	0	0	0	0	200	0	800	0	0
24	3	風作り	0	50	0	0	0	0	0	0	300	0	0 山羊1頭
25	1	風作り	0	0	0	40	0	0	0	0	0	0	0
26	3	農業	30	0	0	0	0	25	0	0	245	0	0 牛1頭（他者所有）, 鶏7羽
27	6	農業	30	0	0	30	0	0	0	0	250	0	0
28	3	農業	100	0	0	0	0	0	50	0	420	0	0 牛4頭, 山羊2頭, 鶏5羽
29	2	日雇い	0	50	0	0	0	0	0	0	50	0	0 鶏5羽, 兎5羽
30	2	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 山羊2頭
31	2	風作り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
32	5	農業	0	0	25	0	0	0	0	0	0	0	0 牛2頭
33	2	農業	0	0	300	0	0	0	0	0	700	0	0
34	4	農業	50	0	150	0	0	0	0	0	850	0	0 山羊3頭（2頭は他者所有）, 鶏4羽
35	4	農業	0	0	200	0	0	0	0	0	0	250	0 牛1頭（他者所有）, 山羊7頭
36	2	農業	50	0	100	0	0	0	0	0	800	0	0 牛2頭（1頭は他者所有）, 鶏2羽
37	4	日雇い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 鶏3羽
平均			41.08	9.86	26.76	7.70	4.05	3.51	60.27	5.41	527.70	67.57	5.41
標準偏差			84.66	29.17	67.36	19.74	24.66	14.14	134.75	32.88	937.99	237.82	32.88

1 bata は約 14.29 m² 700 bata ≒ 1 ha



写真 11 完成した風の裏側

い、問屋に卸していた。屋台を営業する世帯(同21)はオートバイに簡単な調理器具を載せ、おもに他村で、スメダン名物の揚げ豆腐を販売していた。また、チパリアは幹線道路から離れているためか、公務員や会社員など安定した収入を得ることができる職業に就いているものはいなかった。

水田を自作している世帯は17、水田を貸しているのは7世帯、分益小作などで水田を借りて耕作しているのは5世帯あった。23世帯が在来品種を収穫しており、改良品種を収穫したのは4世帯に過ぎなかった。このうち半数の2世帯は在来品種も収穫している。また、サツマイモの生産は1世帯のみしか行っていなかった。これは、チパリアの水田の灌漑方法によってと思われる。前述のように、チパリアでは急な斜面に小規模の棚田を作っており、水路を作って給水している。栽培は年に2〜3回行われるため、収穫間近の棚田の近くに、植え付けを終えたばかりの田があることも珍しくない。水田でサツマイモを栽培する場合、コメの収穫後に田を乾燥させてサツマイモの植え付けを行わなければならないが、急傾斜の棚田で周囲に米の栽培を行っている水田がある場合には、水抜きがうまくいかないことが多いからである。

畑に関しては、自作が6世帯、貸しているのは1世帯、借りているのは3世帯あった。畑ではタバコの栽培が目立っており、収穫したタバコは細く裁断したのち乾燥させ(写真12)、仲買業者に販売していた。

タロンは15世帯が所有しており、1世帯(世帯番号6)が他集落の世帯に貸していた。家畜・家禽は3分の2以上の25世帯で飼養されており、そのうち10世帯が分益小作のような制度のもとで、家畜の貸し借りを行っていた。また、養魚池を所有している世帯はなかった。

6. 比較と考察

ルバク・トゥランでは水田での二〜三毛作により、同じ耕地で改良品種の稲作とサツマイモの栽培が行なわれていた。このうち、米は自家消費中心、サツマイモは換金作物としての性格を帯びていた。タロンと呼ばれる



写真 12 タバコの葉を裁断し乾燥させる

アグロフォレストリーでは、アルバシアやソブシ、スリアンなどの建材となる樹木、クローブ、サトウヤシ、コーヒーや、様々な野菜類が栽培されており、農家世帯の重要な現金収入源となっていた。これらの耕地やタロンでは、多くの人々が日雇い労働者として他世帯に雇用されていた。農業以外の生業としては、安定した収入を得られる公務員や会社員などの職種の他、集落内のイジュック繊維工場や衣服製造工場に雇用されている者も少なからずいた。また、屋台での食品販売、バイクタクシーの運転手など、都市部でよくみられるインフォーマルセクターの経済活動も見られた。

いっぽう、チパリアでは水田の多くは二～三期作により在来品種の稲作がおこなわれており、サツマイモの栽培は1世帯がわずかに行っているにすぎなかった。タロンではアルバシアやソブシ、スリアンなどの建材となる樹木、クローブ、サトウヤシ、コーヒーや、様々な野菜類の他、タバコの栽培が行なわれており、いずれも重要な現金収入源となっていた。これらの耕地では、ルバク・トゥランと同様、多くの人々が日雇い労働者として他世帯に雇用されていた。しかし、その他の現金獲得活動は、内職である風作りやタバコの製造に限られており、ルバク・トゥランと際立った違いを見せている。

二つの調査集落は、この地方の経済や政治の中心地であるランチャカロンへのアクセスに大きな違いがある。ルバク・トゥランはランチャカロン

へつながり、郡を南北に結ぶ幹線道路に面しているが、チパリアは幹線道路から、大型自動車を通ることのできない細く曲がりくねった枝道を2 km ほど進んだ、道の突き当りの尾根に住居が並んでいる。この道路事情の違いが、両集落の現金獲得のための経済活動の選択に大きな影響を与えていると思われる。そのため、ルバク・トゥランではインフォーマルセクターを含め、比較的多様な活動が行われているのに対し、チパリアでは内職などに限定されているのである。また、棚田の規模や灌漑システムにより、チパリアでのサツマイモ栽培は制限を受けていた。

両集落ともに目立つのは、経済的な格差である。ルバク・トゥランでは、自作の水田を所有している9世帯の水田面積は最大の400 bata (約0.57 ha) から最小の50 bata (約0.07 ha) まで8倍の開きがある。さらに、分益小作などにより土地を借りて耕作をしている4世帯を含めた在来と改良の両品種を合わせた生産量を見ると、最多が2,300 kg、最少が100 kgで、23倍もの差異がある。サツマイモの生産量では、労働者を雇用して大規模に耕作を行っている世帯を除く11世帯で、最多が2,500 kg、最少が60 kgで、およそ42倍の差異がある。チパリアでは、自作の水田を所有する17世帯の耕地面積は、最大の460 bata (約0.66 ha) から最小の15 bata (約0.02 ha) まで30倍以上の開きがある。コメの生産のある25世帯の生産量は、最多が4,650 kg、最少が50 kgで93倍もの差異が生じている。こうした格差は、それぞれの世帯のこれまでの土地の相続や売買、生業戦略や年齢、人数などの世帯構造の差異によっていると思われる。

7. おわりに

調査初年度に行った両集落の聞き取りから、高い人口支持力を持つ西ジャワ州スダグ農村の生業が均質なものではないことがわかった。農村とはいいいながら、微小環境や道路などの社会環境の差異が、両集落の生業に大きな影響を与えているのである。また、集落内部の世帯ごとの生業戦略にも多様性がみられ、農業以外の生業で生計を維持している世帯

も少なからず存在していることがわかった。安定した収入を得る機会を持っているルバク・トゥランのみならず、幹線道路から遠くにあるチパリアでも風作りなどの内職が生業として存在していることは、スング農村に現金獲得活動が浸透していることをあらわしている。さらに、農家世帯にも経済的な格差があることがわかった。分益小作制の他にも、耕作地を持たない世帯のメンバーが他世帯に雇用されて現金収入を得ることが日常的に行われているのである。こうした世帯が存在することは、スング農村の高い人口支持力を示しているのかもしれない。

農家世帯の作物生産を現金に換算し、日雇い労働やインフォーマルセクターでの経済活動からの収入と比較すると、集落内の経済格差は一層大きなものになることが予想される。2015年度の調査では、こうした格差がどのようなもので、どのようにして生じたのかについて定性的、定量的な調査を行いたい。また、五十嵐（1987）や門司（1988）も指摘しているように、雨季と乾季が明確な西ジャワ州では、季節による活動にきわだった差異がある。実際の活動を観察することと、季節ごとの作業に関する聞き取りを行うことで、生業活動の季節性を明らかにしていきたい。

〈謝辞〉

我々の調査を許可していただいた西ジャワ州およびスメダン県政府、ランチャカロン郡とナガラワンギ村およびランチャカロン村の行政担当者に感謝いたします。調査計画のカウンターパートであるパジャジャラン大学生態学研究所のエリ所長、パムパン博士、ブディ博士には調査計画の立案と調査許可取得にご尽力いただきました。とくに、ブディ博士には調査地の選定の他、我々の調査にも同行していただき、貴重な助言をいただきました。また、同研究所に所属する修士課程の大学院生であるアスニ氏、ロビ氏、アデラ氏には、聞き取り調査においてスング語の通訳をしていただきました。ナガラワンギの高校教師であるイイス氏には調査地の選定と宿舎の手配をしていただきました。彼らの協力がなければ、我々の調査の実施は不可能でした。これらの方々に深く感謝いたします。最後に、愚かな

質問や振る舞いにもかかわらず、こころよく我々を受け入れてくださった、イワン氏をはじめとするルバク・トゥランの皆様、アノ氏をはじめとするチパリアの皆さんに衷心より厚くお礼申し上げます。

〈引用文献〉

- 五十嵐 (1987) 「農作業, 季節, 星 — 西ジャワ・プリアガン高地における畑地耕作をめぐる季節性と農作業のタイミング」『東南アジア研究』25(1): 85-108.
- ギアーツ, クリフォード (2001) 『インボリューション — 内に向かう発展』池本幸生訳 NTT 出版(原書は Geerts, C. (1963) “Agricultural Involution: The Processes of Ecological Change in Indonesia” Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press).
- Kubota, N., H. Y. Hadikusumah, Oekan S. Abdoellah and N. Sugiyama (2002a) “Changes in the Performance of the Homegardens in West Java for Twenty Years (1) Changes in the Function of Homegardens” Japanese Journal of Tropical Agriculture 46(3) 143-151.
- Kubota, N., H. Y. Hadikusumah, Oekan S. Abdoellah and N. Sugiyama (2002b) “Changes in the Performance of the Homegardens in West Java for Twenty Years (2) Changes in the Utilization of cultivated plants in the Homegardens” Japanese Journal of Tropical Agriculture 46(3) 152-161.
- Mubyarto (2000) “Indonesia’s Transmigration Program: Experience and Prospect”, In *Population Movement in Southeast Asia: Changing Identities and Strategies for Survival*, National Museum of Ethnology, 1-8.
- 門司和彦 (1988) 「西ジャワ・スング農民の仕事: その季節による変動と性・年齢による差異 (〈特集〉西ジャワ・プリアンガン地方の健康・生態・人口)」『東南アジア研究』25(4): 570-592.
- Okubo, S., Parikesit, K. Harashima, D. Muhamad, Oekan S. Abdoellah and K. Takeuchi (2010) “Traditional perennial crop-based agroforestry in West Java: the tradeoff between on-farm biodiversity and income” *Agroforestry Systems* 80(1) 17-31.
- プロマーコンサルティング(2013) 『平成 24 年度海外農業情報調査分析事業(アジア)第四部インドネシア: 農林水産業の現状及び農業政策』東京: プロマーコンサルティング.
- Suparno, E. (2007) *Paradigma Baru Transmigrasi*, Jakarta: Departemen Tenaga Kerja dan Transmigrasi Republik Indonesia.